

福祉タク補助 調査へ

尾張西部準特協



冒頭、立ってあいさつする協議会の加藤会長（右隣は福本副会長）

尾張西部交通圏準特定地域タクシー協議会（会長＝加藤博和名古屋大学大学院准教授）は8月7日、第3回協議会を開催した。活性化に向けた地域計画の見直し議論で、①自治体の福祉タクシー補助制度の実態調査②正午から夕方までの時間帯の需要創出③観光モデルコースの検討―などに

取り組むことになった。

①の福祉タクシー補助制度については、出席者から「自治体の福祉タクシー補助の方式がまちまち。現場の乗務員の立場では統一してほしい」（服部達彦全自交愛知地連委員長）と要望が出たことから、加藤会長が協議会として対応することを関係者に求めた。オブ

ザーバーとして出席していた愛知運輸支局の古橋靖弘首席運輸企画専門も「運輸局にも協力を求め調査したい」とした。

会議の中で服部委員長は「自治体によって補助が、初乗り相当額だったり、具体的な金額だったりする。降車時に券を渡される乗務員には覚えきれずプレッシャーとなっている」と強調。加藤会長も「各自体がどういう補助をしているか横並びで見てみる必要がある。補助券を発行している部署と協議会に出席いただいている部署が違ってもいいが、協議会から提言していきたい」とした。

②の正午から夕方までの需要創出については、協議会の福本雅之副会長が「夜などは一部で配車が難しい」と言われることがある」と

発言。これに対して名鉄西部交通の河村富貴社長が「終電近くの時間帯は車が足りないことがある。曜日によっても需要が異なり、対応が難しい。逆に昼の12時から4時くらいは需要が少ない」と需要波動の実態を説明。加藤会長は「昼間に住民に外出を促すようなことができないか」と活性化策につなげたい意向を示した。

③の観光モデルコースについては新たに委員となった一宮市観光案内所の犬飼芳樹副所長が、旅行業窓口での観光タクシーの予約状況、同市の歴史街道を記した案内パンフレットなどをもちに、取り組みの必要性を提案。

加藤会長は「地元の人にとっては昔からあるものでも、パワースポットなどで注目を集めることもある」と、身近な観光資源の発掘の可能性を指摘。福本副会長も「一宮は喫茶店のモーニングが有名。タクシーでまわるアイデアはあるのではないか」などと述べた。